

対人関係における信頼の前提要因の国際比較研究

佐々木 正道

A Cross-National Study of Factors Which Lead to Trusting Others Before a First Meeting

SASAKI Masamichi

In contemporary society, mobility in urban areas has increased and people have greater opportunity to meet and communicate with strangers. In such situations we typically rely on such things as reputation, personal networks and/or past performance to determine whether or not a person is trustworthy. Occasionally, people also rely on trust stereotypes. The present study, using correspondence analysis for eight nations' data sets on trust, found that three clusters emerge in determining whether or not to trust others before a first meeting. The cluster formed by a combination of "being introduced by friend(s)," "fame or a good reputation," "performance record" and "word-of-mouth communication or information obtained from other(s)" is the most important cluster; followed by a cluster formed by "high social or occupational status" and "high level of educational background"; and finally a cluster formed by sharing the same birthplace or being graduates of the same school. We call these three clusters the 'fame and personal network factor,' the 'high achieved status factor' and the 'same birthplace and school factor,' respectively.

Our findings indicate that people in Finland as a nation have a high level of trust. The United States, Japan, and Taiwan are found to be nations of high to middle-level trust, and the Czech Republic is found to be a nation of middle-level trust, all with regard to the fame and personal network factor as the most important in determining a person's trustworthiness before ever meeting them. Russia is seen as middle-level trust and Turkey as low-level trust for the high achieved status and same birthplace and school factors.

Our findings also indicate that the relationships between gender and the three factors are rather weak among the seven nations. With respect to the fame and personal network factor and the high achieved status factor, males are more closely associated in some nations, while females are more closely associated in the remaining nations. Finland shows no relationship with regard to gender. For the same birthplace and school

factors, males rather than females relate with it. Finally, as for the relationship between age and the three factors, the young age strata (i.e., aged 20 to 49) regards the fame and personal network factor as the important among six of eight nations and the older age strata (i.e., 50 and above) regards the high achieved status factor as most important among five nations. Also, the older age strata regards the same birthplace or school and the high achieved status factors as most important in three nations. Overall, the present study supports some of the theoretical discussions and previous experimental findings reported by sociopsychologists.

キーワード：信頼の前提要因，国際比較，コレスポネンス分析

はじめに

現代社会において人々の都市部への移動が盛んになったことにより，初対面や見知らぬ人々とのコミュニケーションをとる機会が多くなり，ジンメル (Simmel 1950, p. 360) は，この根本的变化が，社会関係，特に対人関係における信頼に変革をもたらしたと述べている．この変革の中で直接にまたは継続的には知り得ない人々に対して，信頼できるかどうか判断する上で，その人の学歴，業績，医者や弁護士などの高度の資格や社会的地位，また名声や他者からの評価・信任などを重視するようになった．(Sztompka 1999, p. 73; Gillespie 2008, pp. 286-287)¹⁾ ミズタル (Miztal 1996, p. 121) は，名声は，信頼予測の指標となり得るため信頼できる人を見出す上で役立つとし，また，そのことは限られた情報の中で，契約を締結する上で経費を節約できる経済上のメリットがあるとも述べられている．(Lorenz 1988, pp. 198-202; Dasgupta 1988)

シュトンプカ (Sztompka 1999, p. 73) は，“重要な他者”からの情報や友人などの紹介により信頼は伝播しやすいとし，クック，ハーディンとレビー (Cook, Hardin, and Levi 2005) は，対人関係において相手を信頼できるかどうかについて，我々はしばしばステレオタイプや相手が自分と同じ集団または肯定的に評価できる集団に所属しているかどうかに基づいて判断することがあるとし，さらに，ステレオタイプは社会階層システムに基づき，高い地位の人はより信頼される傾向があると述べている．シュトンプカ (Sztompka 1999, p. 83) は，相手を信頼する上で名声，業績，外見 (appearance) がそれぞれ重要であるが，実際には人々はそれらのすべてとか，それぞれの組み合わせ，またはそれぞれに優先順位をつけることがよくあるとし，どれが相手を信頼する上でより重視されるかについては，文化や時代によって異なると述べている．また，文化によっては肩書，資格，勲章，他の象徴的しるしなどを信頼の上位に位置付けており，それは社会的地位または威信の階層が急勾配で伝統的なエリート層の支配する社会

において見られ、より民主的で平等な社会では、大衆からの人気の高さやメディアでの露出度などが重視される。（Sztompka 1999, p. 74）

他にも信頼する上で重要な前提要因となる場合がある。それは、人々は類似する要因を持つ人（同性、同国、同郷、同窓など）を信頼し、持たない人を信頼しない傾向がある。（Earle and Cvetkovich 1995, p. 17; Elsbach 2004, p. 279; Sztompka 1999; Cook, Hardin, and Levi 2005）また、ビジネスによっては、同郷人があたかも親族のように取り扱われ、商取引のパートナーとなることが期待される。この場合は、たとえ互いに見知らぬ者同士であったとしても、同郷人ネットワークを通して相互の連結が既に図られているとみなす確率が高いからである。これを名声の代用と名付けた。（Cook, Hardin, and Levi 2005, p. 25）この点に関して、中国企業では、親族を雇用できない場合には、代わりに信頼できる者として同郷人などを雇用するという例が見られる。（Hamilton and Cheng-Shu 1990）

本研究の目的は、国際比較の視点から 1) いかなる前提が、対人関係において信頼する上で重視されるか 2) それぞれの前提が互いに関連しあい、組み合わせとなってクリークを形成しているか 3) クリークが形成された場合、各国とクリークがどのように関連しているか

4) 信頼と属性、特に性別や年齢との関連についての研究結果（Delhey and Newton 2003, p. 110; Patterson 1999, p. 173; Sasaki 2016, p. 526等）があるが、クリークが形成された場合、それ（ら）と属性との間に関連があるかどうかの4点についてである。我々が2008年から2012年までに実施した8カ国調査（日本、台湾、アメリカ、ドイツ、フィンランド、チェコ、ロシア、トルコ）のデータに基づき、コレスポネンス分析を用いて、これらの目的の解を得ることとした²⁾。

1. 対人関係における信頼する上で重視される前提要因の項目

分析に使用した質問と信頼の前提要因として用意した回答選択項目は次のとおりである。

あなたは、日常生活や仕事などで初対面の人に会う前にどのようなことがあればその人を信頼しやすくなると思いますか。この中からあてはまるものをいくつかもあげてください。

（複数回答）

- | | |
|------------------|----------------------|
| 1 友人の紹介 | 7 取得が難しい資格（医者や弁護士など） |
| 2 名声やよい評判 | 8 同じ学校や大学の卒業 |
| 3 いままでの実績 | 9 同じ出身地 |
| 4 口コミや他人からの情報 | 88 その他（記入 ） |
| 5 高い社会的または職業上の地位 | 89 初対面の人は信頼できない |
| 6 高学歴 | 99 わからない |

回答選択項目の国別選択回答割合を表-1に示す。

表-1 各項目の回答割合 (%)

	アメリカ	日本	台湾	ドイツ	トルコ	チェコ	フィンランド	ロシア
1. 友人の紹介	64.5	61.3	54.3	48.6	28.1	55.9	44.6	37.1
2. 名声やよい評判	48.2	21.2	41.5	52.2	7.5	69.2	24.6	35.3
3. いままでの実績	54.5	43.9	10.7	25.2	16.5	45.1	48.9	15.4
4. 口コミや他人からの情報	55.0	32.3	38.8	33.1	7.9	62.9	48.1	16.7
5. 高い社会的または職業上の地位	13.1	11.9	13.4	12.3	8.2	18.7	10.8	16.7
6. 高学歴	21.0	2.1	6.9	15.5	15.5	26.6	13.1	19.0
7. 取得が難しい資格 (医者や弁護士など)	23.4	8.5	10.5	17.0	5.1	31.7	33.3	15.3
8. 同じ学校や大学の卒業	5.3	11.5	5.6	4.0	4.6	15.0	5.4	3.9
9. 同じ出身地	7.6	15.3	6.3	11.5	14.2	15.5	6.8	4.4

表-1から「友人の紹介」は、ドイツ、チェコ、フィンランドを除く5カ国においてそれぞれ最も高い割合であり、「名声やよい評判」は、ドイツとチェコにおいて最も高い割合、アメリカ、台湾の2カ国においても高い割合を占めている。「いままでの実績」は、フィンランドにおいては最も高い割合で、アメリカ、日本、チェコの3カ国が比較的高い割合、「口コミや他人からの情報」は、アメリカ、チェコ、フィンランドでは高い割合を占めている。他国と比べて際立った割合の回答があった項目は、「取得が難しい資格」がアメリカ、チェコ、フィンランドで比較的高く、「高学歴」がアメリカとチェコで比較的高い。したがって、本研究目的である「1）いかなる前提が対人関係において相手を信頼する上で重視されているか」については、「友人の紹介」「名声やよい評判」「いままでの実績」「口コミや他人からの情報」の4項目のいずれかの回答が各国とも最も高い割合、またはかなり高い割合を占めていることがわかる。

以上読み取れたことを踏まえて、信頼の前提要因9項目（以下項目と略す）それぞれが、どのように相互に関連してクリークを形成しているか各国について見ていく。

2. 各国の9項目のコレスポネンス分析 (CA) による布置とクリーク形成の有無

9項目がそれぞれ組み合わせとなってクリークを形成しているかどうかについて国別にコレスポネンス分析を行った。アメリカの分析においては、表-1に見られるように「同じ学校や大学の卒業」（以下図では同窓と略す）と「同じ出身地」（以下図では同郷と略す）の回答割合がかなり低く（5.3%と7.6%）、他の7項目の布置が狭い範囲に集中しているため、それら2項目を除外して7項目で再分析した。日本の分析においては、「高学歴」の該当数が少なく

図-1 信頼項目の布置図（アメリカ） 1次元=1.998 2次元=1.109

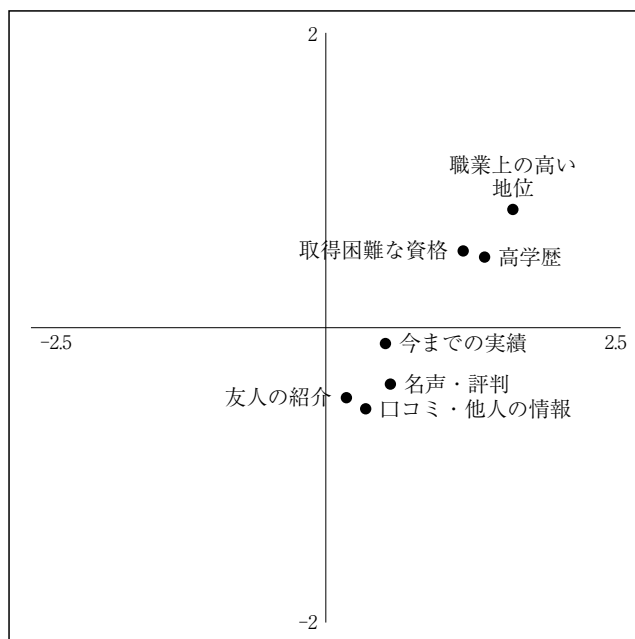


図-2 信頼項目の布置図（日本） 1次元=1.666 2次元=1.284

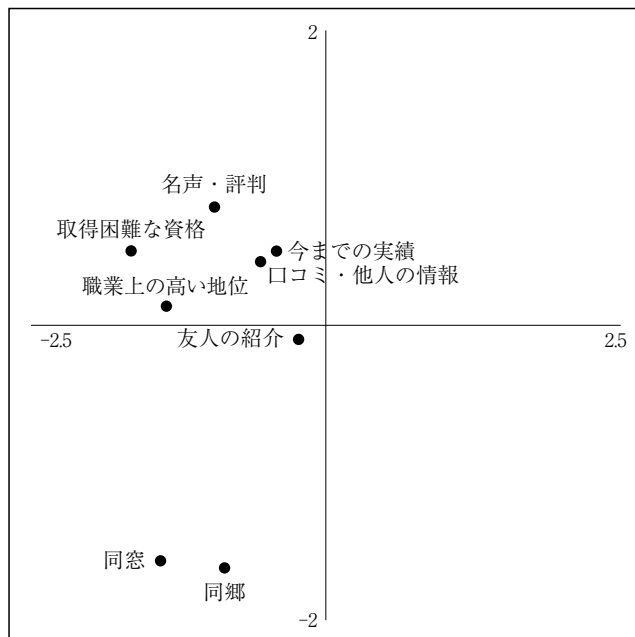


図-3 信頼項目の布置図（台湾） 1次元=2.135 2次元=1.276

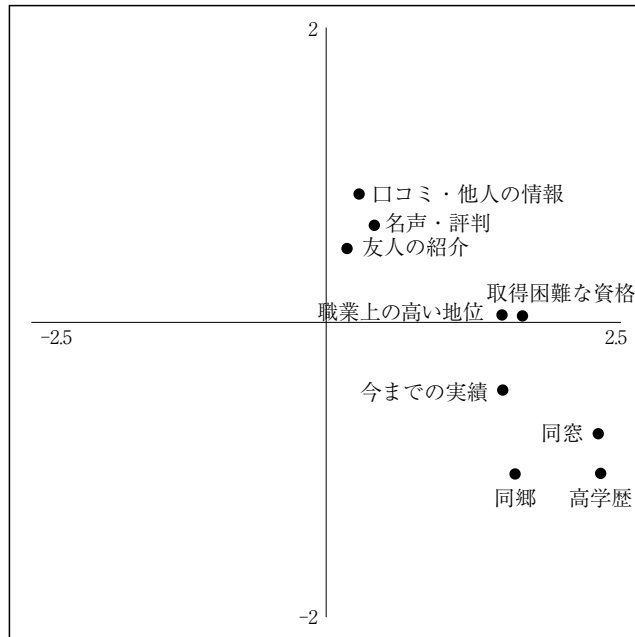


図-4 信頼項目の布置図（ドイツ） 1次元=1.921 2次元=1.327

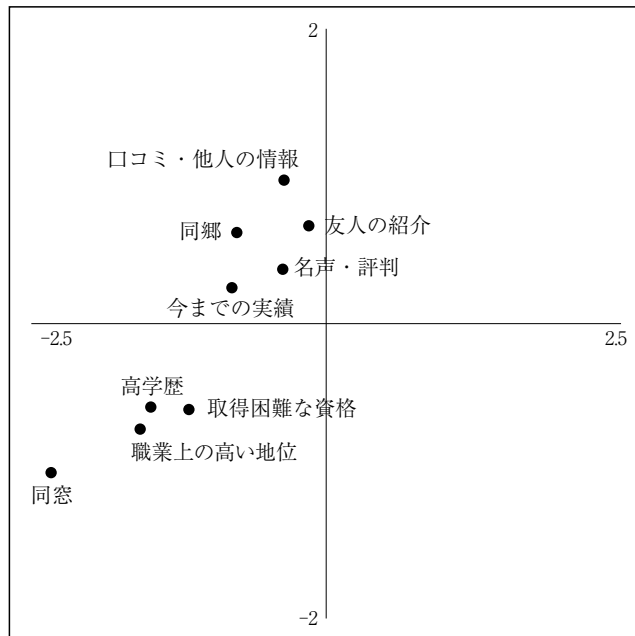


図-5 信頼項目の布置図（ロシア） 1次元=1.968 2次元=1.102

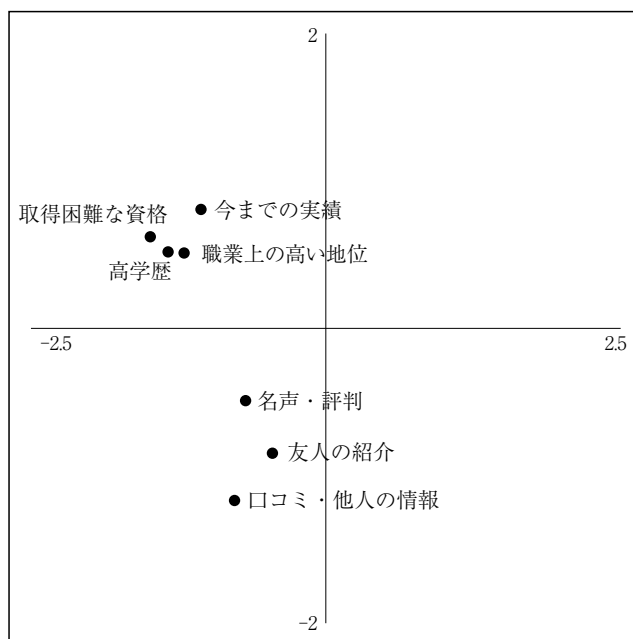


図-6 信頼項目の布置図（トルコ） 1次元=1.631 2次元=1.354

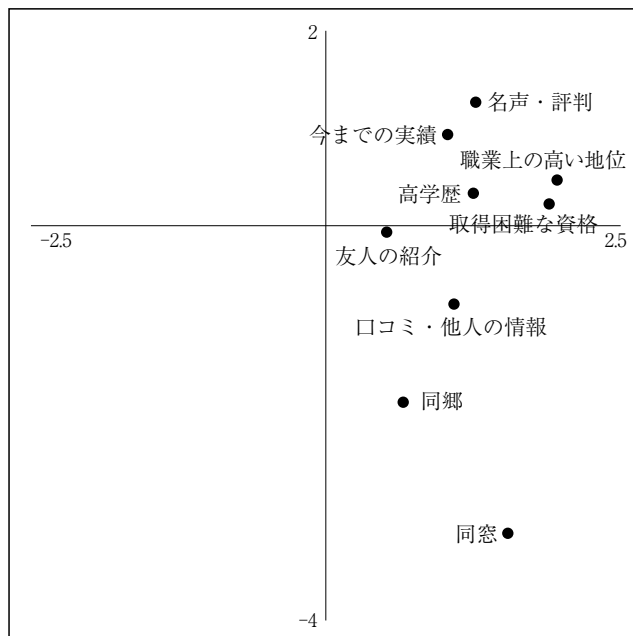


図-7 信頼項目の布置図 (チェコ) 1次元=2.978 2次元=1.278

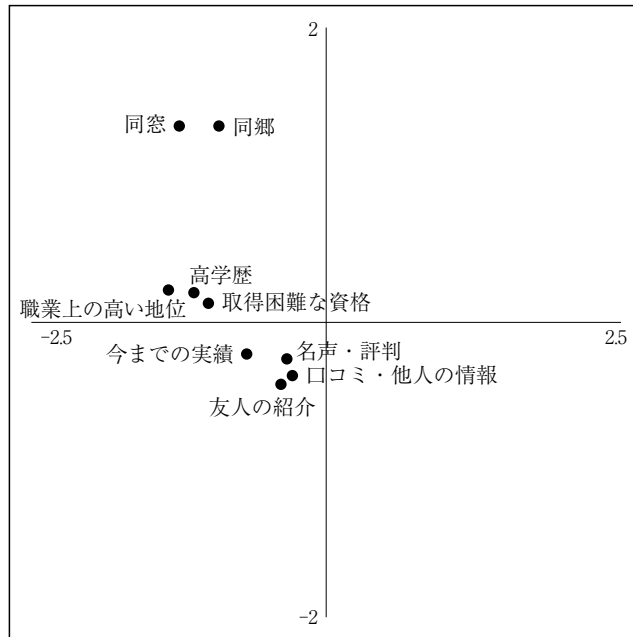
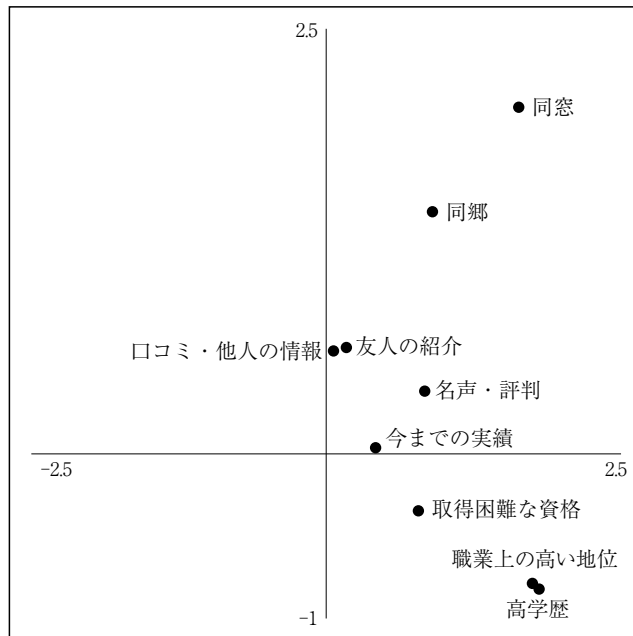


図-8 信頼項目の布置図 (フィンランド) 1次元=1.851 2次元=1.287



(2.1%), かなり離れて布置するため, 除外して8項目で再分析した. ロシアの分析においては, アメリカと同様に「同じ学校や大学の卒業」と「同じ出身地」の回答率は低く(3.9%と4.4%), 原点から同方向にかなり離れて布置する. それに対して他の7項目が固まって布置しているため, 2項目を除外して7項目で再分析した.

その結果, 図-1 から図-8 より3つのクリークが各国とも共通して形成されることが明らかとなった.

それらを, A, B, Cのクリークとし, 各項目がどのクリークに入っているかを表-2に示した.

Aのクリーク = 「友人の紹介」, 「名声やよい評判」, 「いままでの実績」, 「口コミや他人からの情報」

Bのクリーク = 「高い社会的または職業上の地位」, 「高学歴」, 「取得が難しい資格(医者や弁護士など)」

Cのクリーク = 「同じ学校や大学の卒業」, 「同じ出身地」

表-2 各項目の所属する3つのクリーク

	アメリカ	日本	台湾	ドイツ	トルコ	チェコ	フィンランド	ロシア
1. 友人の紹介	A	A	A	A	A	A	A	A
2. 名声やよい評判	A	AB	A	A	A	A	A	A
3. いままでの実績	A	A	B	A	A	A	A	B
4. 口コミや他人からの情報	A	A	A	A	A	A	A	A
5. 高い社会的または職業上の地位	B	B	B	B	B	B	B	B
6. 高学歴	B	除外	C	B	A	B	B	B
7. 取得が難しい資格 (医者や弁護士など)	B	B	B	B	B	B	A	B
8. 同じ学校や大学の卒業	(C)	C	C	C	C	C	C	(C)
9. 同じ出身地	(C)	C	C	A (3次元でC)	C	C	C	(C)

なお, アメリカとロシアは前述のように「同じ学校や大学の卒業」と「同じ出身地」の2項目の回答割合がかなり低いので分析から除外したが, 他国との比較のため, 9項目全てを含む分析結果を見ると, これら2項目が1次元 x 2次元で他の7項目の布置からかなり離れているものの相互に近く布置し, 1つのクリークを形成している. また, 3次元でも互いに近く布置し, 同じく1つのクリークを形成していることが確認されたのでCのクリークとして扱うことにした.

形成された3つのクリークと各国の異なる点をあげる。

日本は「名声やよい評判」がAのクリークとBのクリークのどちらか区別しにくい中間的な位置にある。

台湾は「いままでの実績」がAのクリークではなくBのクリークに入り、「高学歴」がBのクリークではなくCのクリークに入っている。

ドイツは「同じ出身地」が1次元x2次元でAのクリークに入っている。ただし、3次元目では、他の項目から離れて「同じ学校や大学の卒業」と「同じ出身地」が互いに近く布置する。したがって3次元でCのクリークに入っているとみなすことができる。

トルコは「高学歴」がBのクリークよりもAのクリークに入っていると捉えることができる。

フィンランドは「取得が難しい資格(医者や弁護士など)」がBのクリークではなくAのクリークに入っている。ロシアは「いままでの実績」がAのクリークではなくBのクリークに入っている。

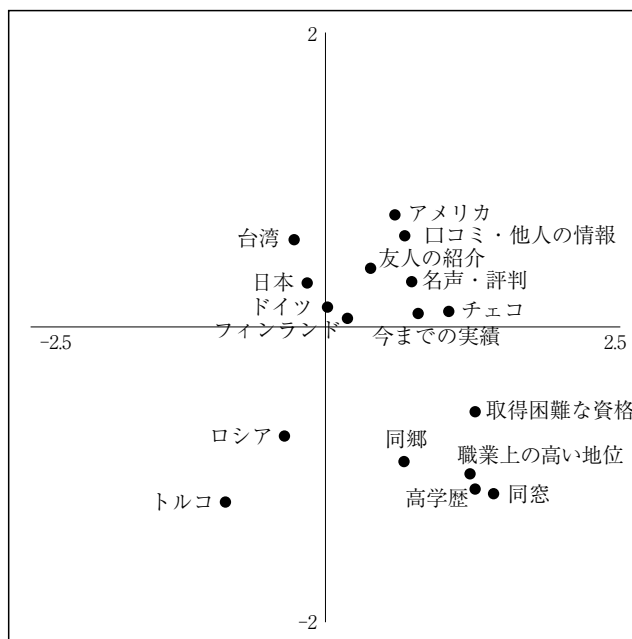
これらの結果から、それぞれのクリークを形成する項目の組み合わせは、国によって若干異なるものの、表-1からどの国においてもAのクリークの平均回答割合はBとCのクリークの平均回答割合に比べて高い値を示している³⁾。

この3つのクリークの内容は、Aは名声・人的ネットワークの要因、Bは高い獲得的地位の要因、Cは「同じ学校や大学の卒業」、「同じ出身地」の要因と捉えることができ、とりあえず8カ国に共通の分類としておくことに無理はないと考える。

3. 信頼の前提要因と国別のコレスポネンス分析

各国の分析をした結果、多少の違いはあるものの、A、B、Cの3つのクリークが信頼の前提要因として形成されるという共通した構造を持つことが確認されたので、8カ国を合わせて分析し、8カ国間の関連を解釈することとした。そこで8カ国のボンドサンプルについてコレスポネンス分析を行った。その結果を図-9に示す。日本、台湾、アメリカ、チェコ、ドイツ、フィンランドが2軸の上でAのクリークの近くに布置し、ロシアとトルコが2軸の下のBとCのクリークから離れて布置している。このことから、図-9からクリークと各国との関係は、世界価値観調査(ASEO/JDS, 2010)による国家の信頼レベルの高、中高、中、低に幾分対応していることが読み取れる。つまりフィンランド(高信頼国)日本、台湾、ドイツ(中高信頼国)、チェコ(中信頼国)、の5カ国が、それぞれ互いに近く布置し、Aのクリークに関連している。アメリカ(中高信頼国)は、他の国から少し離れて布置しているが、Aのクリークに関連している。ロシア(中信頼国)とトルコ(低信頼国)が互いに近く布置し、BとCのクリークと関連している。地域と信頼の前提要因との関連から見ると、アジアと欧米が名声・人的ネットワークの要因を重視し、中近東(トルコ)とロシアが高い獲得的地位の要因と「同じ学校や

図-9 信頼項目と8カ国の布置図（ボンドサンプルによる）
第1次元目と第2次元目の平面布置（固有値：1次元目2.409，2次元目1.432）



大学の卒業」,「同じ出身地」の要因を信頼の前提として重視していると解釈できる。

4. 信頼の前提要因と性別のcorespondence分析

国別に信頼の前提要因と性別との関連をcorespondence分析の布置から読み取って見た。

まず、国別に読み取った様子を総合的に概観した。

性別を項目と同様に扱って、項目と性別のcorespondence分析をしてみると、項目の布置は、性別を入れないcorespondence分析結果とほぼ変わらない。どの国も項目は第1次元目の左右のいずれか一方に布置し、第2次元目で男性-女性に分かれる。しかし、男性と女性の布置は互いに非常に近く、原点付近にある。すなわち、性別は項目を形成するクリークとの関連が弱いと言える。関連は弱いものの項目が形成するクリークとの位置関係を読み取ったのが表-3である⁴⁾。フィンランドは男女がほぼ同じ位置にあり、性別との関連はない。Aのクリークはアメリカ、台湾、チェコ、ロシアでは女性が、ドイツは男性との同じ領域にある。同領域に布置することは、関連を示している。日本とトルコは男女両方にまたがる領域にあり、性別の特徴が見えない。Bのクリークはアメリカ、チェコでは男性の領域にあり、日本、ドイツ、ロシアでは女性の領域にある。Cのクリークは日本、台湾、チェコでは男性の領域に、トルコでは女性の領域にある。なお、アメリカ、ロシアについては、「同じ学校や大学の卒業」と「同

図-10 信頼項目と性別の布置図（アメリカ） 1次元=1.99 2次元=1.122

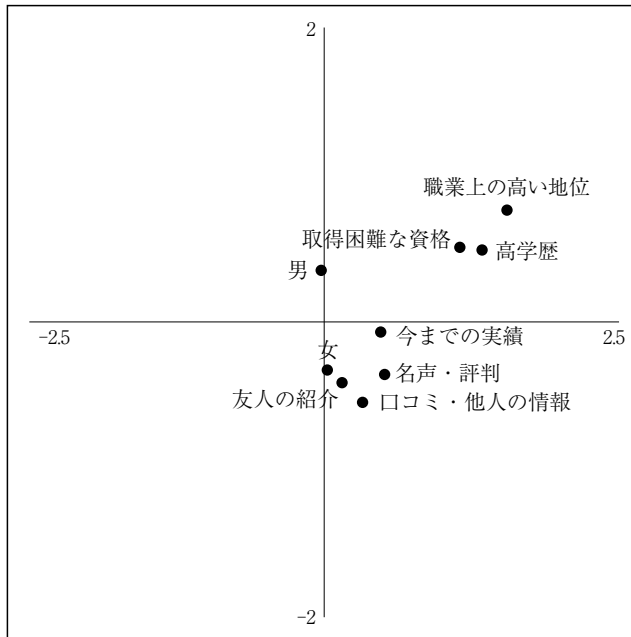


図-11 信頼項目と性別の布置図（日本） 1次元=1.674 2次元=1.285

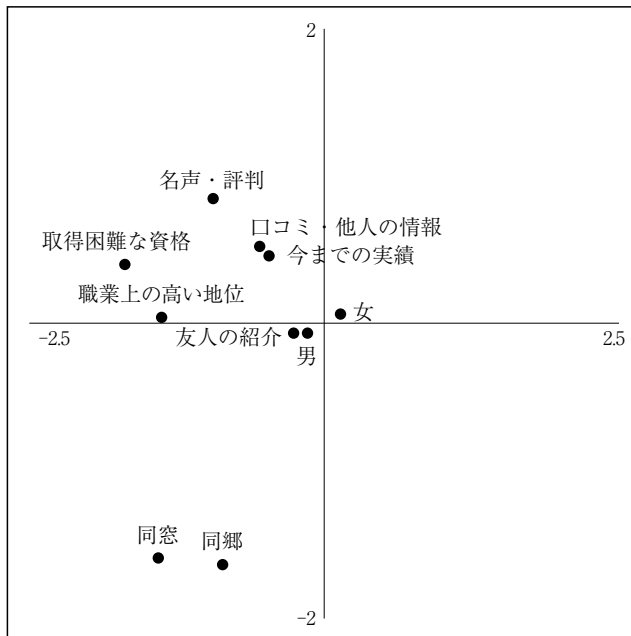


図-12 信頼項目と性別の布置図（台湾） 1次元=2.135 2次元=1.280

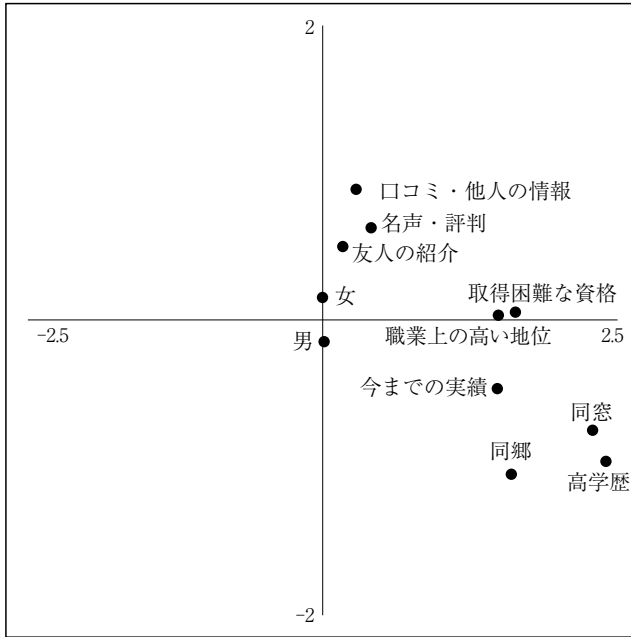


図-13 信頼項目と性別の布置図（ドイツ） 1次元=1.928 2次元=1.327

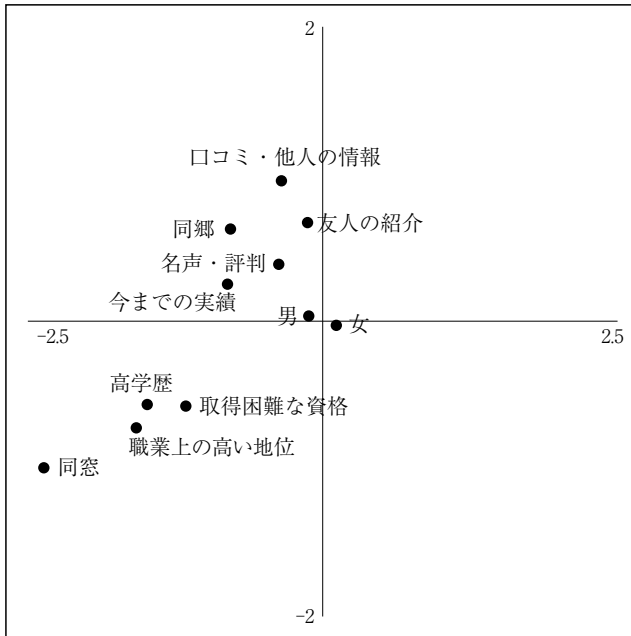


図-14 信頼項目と性別の布置図（ロシア） 1次元=1.970 2次元=1.102

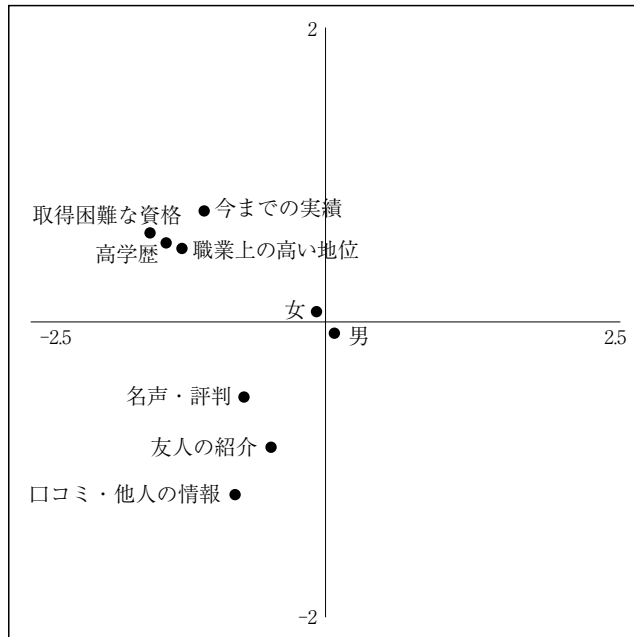


図-15 信頼項目と性別の布置図（トルコ） 1次元=1.640 2次元=1.378

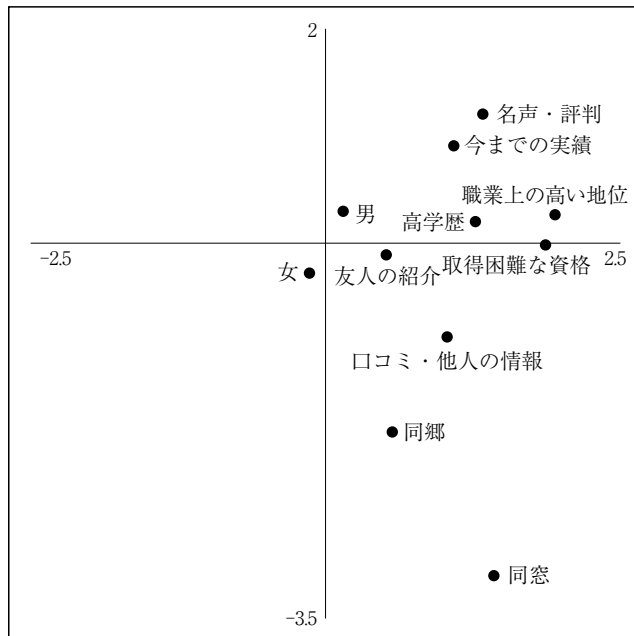


図-16 信頼項目と性別の布置図（チェコ） 1次元=2.978 2次元=1.281

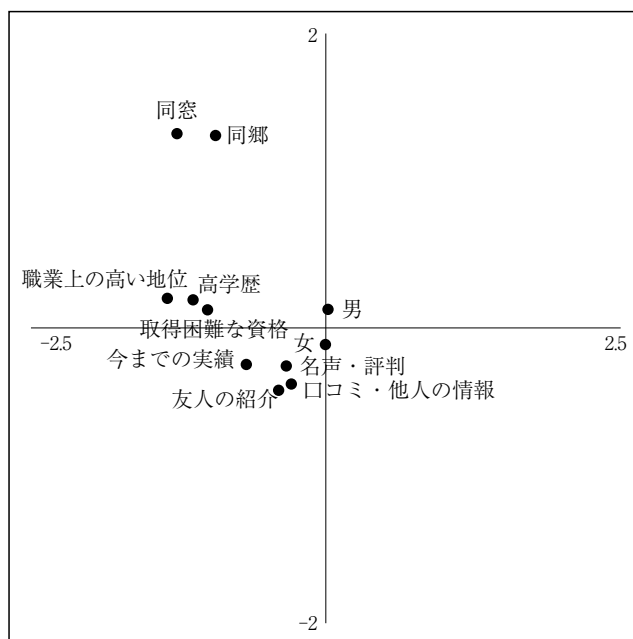
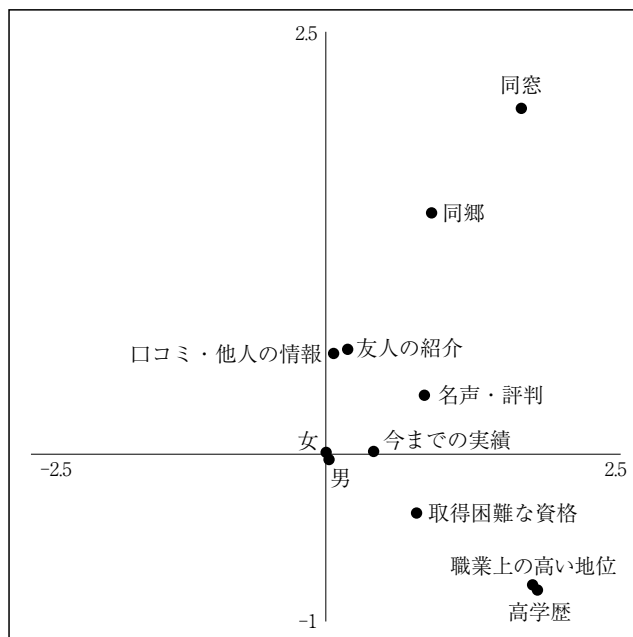


図-17 信頼項目と性別の布置図（フィンランド） 1次元=1.851 2次元=1.287



じ出身地」の 2 項目を除外せずに再分析した結果によると、いずれも男性の領域にある。またドイツについては、「同じ学校や大学の卒業」と「同じ出身地」は 1 次元 x 2 次元では離れてはいるが、3 次元では互いに近く布置し C のクリークを形成し男性の領域にある。

表-3 各国の 3 つのクリークと性別との関連

	アメリカ	日本	台湾	ドイツ	トルコ	チェコ	フィンランド	ロシア
Aのクリーク	女性	男女	女性	男性	男女	女性	関連なし	女性
Bのクリーク	男性	女性	男女	女性	男女	男性	関連なし	女性
Cのクリーク	男性	男性	男性	男性	女性	男性	関連なし	男性

5. 信頼の前提要因と年齢別のコレスポネンス分析

信頼の前提要因と年齢別の関連は、年齢層を 20-34 歳（若年層 1）、35-49 歳（若年層 2）、50-64 歳（高年齢層 1）、65 歳以上（高年齢層 2）の 4 カテゴリーとして項目とともにコレスポネンス分析し、各国の布置図から読み取った。

項目の布置は、年齢層を加えない場合とほぼ同じである。年齢層は若い方から高い方へと 2

図-18 信頼項目と年齢別の布置図（アメリカ） 1次元=2.002 2次元=1.140

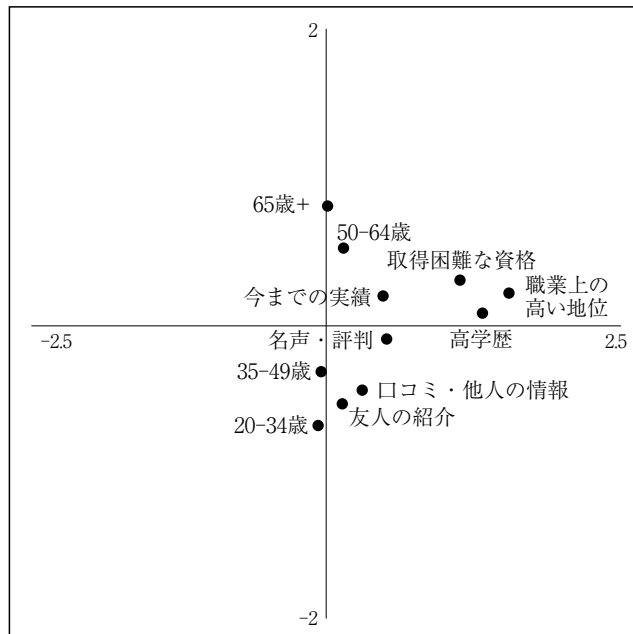


図-19 信頼項目と年齢別の布置図（日本） 1次元=1.743 2次元=1.393

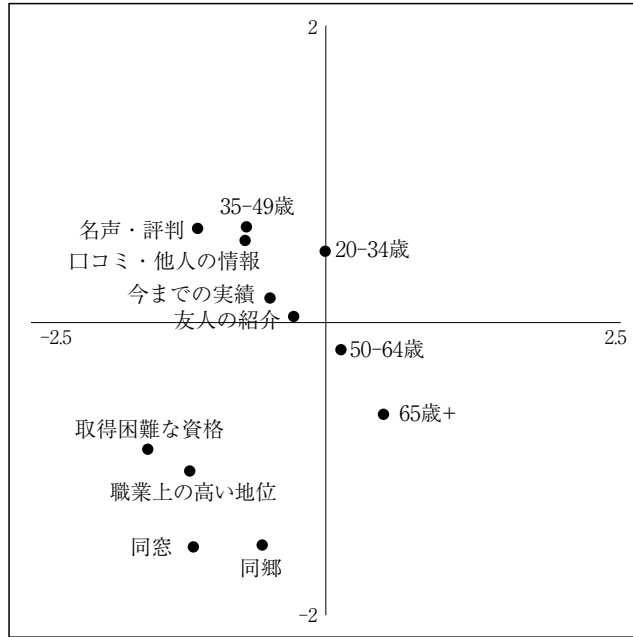


図-20 信頼項目と年齢別の布置図（台湾） 1次元=2.162 2次元=1.357

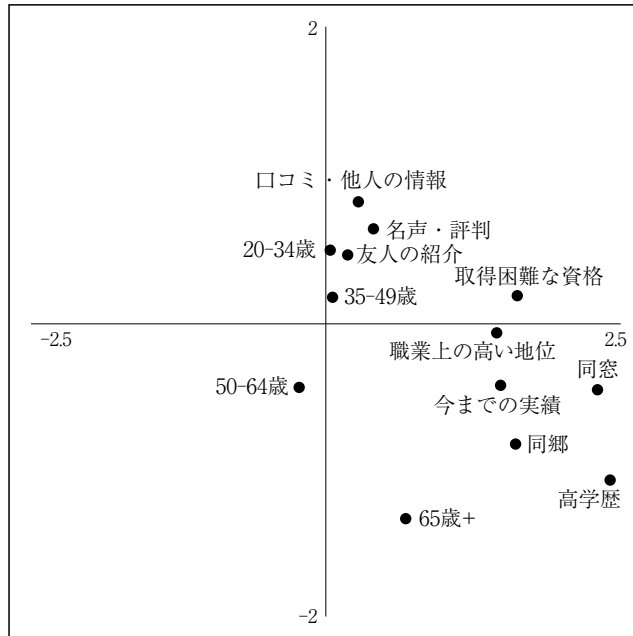


図-21 信頼項目と年齢別の布置図（ドイツ） 1次元=1.928 2次元=1.333

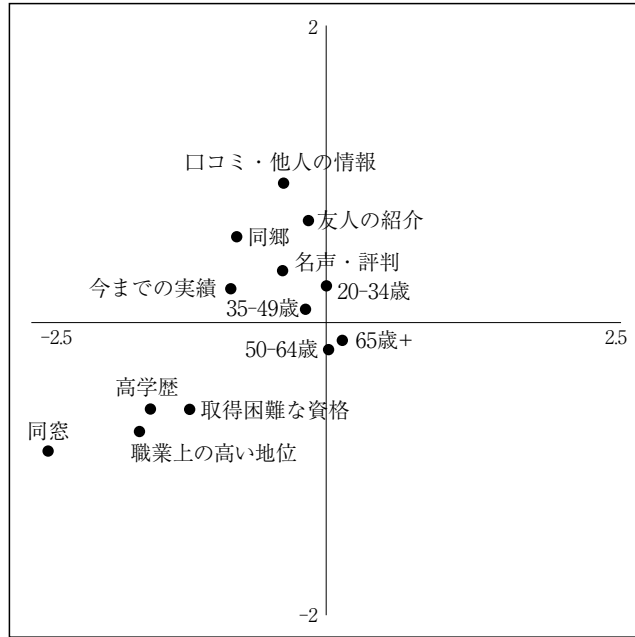


図-22 信頼項目と年齢別の布置図（ロシア） 1次元=1.983 2次元=1.103

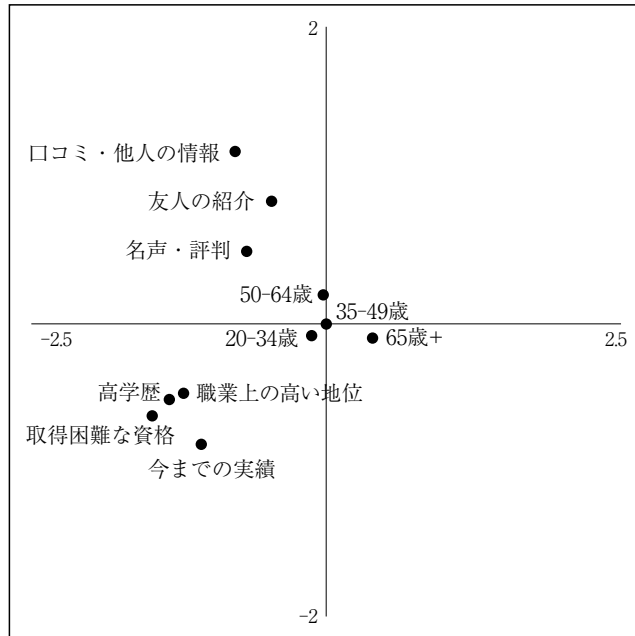


図-23 信頼項目と年齢別の布置図（トルコ） 1次元=1.649 2次元=1.362

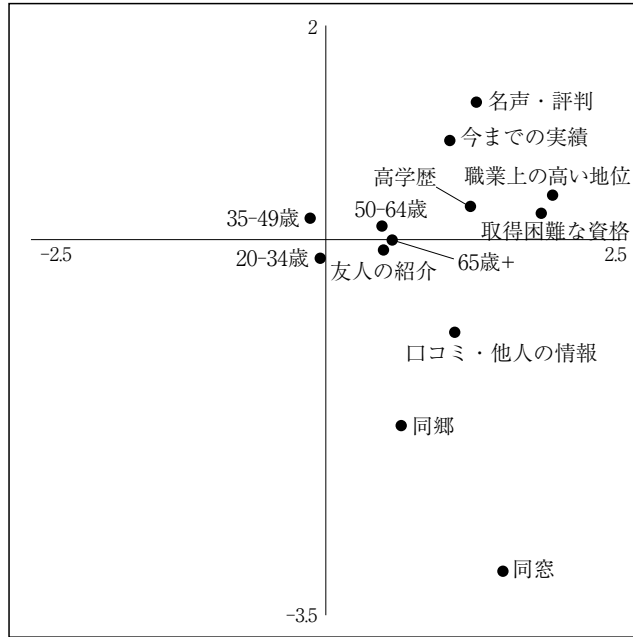


図-24 信頼項目と年齢別の布置図（チェコ） 1次元=2.983 2次元=1.286

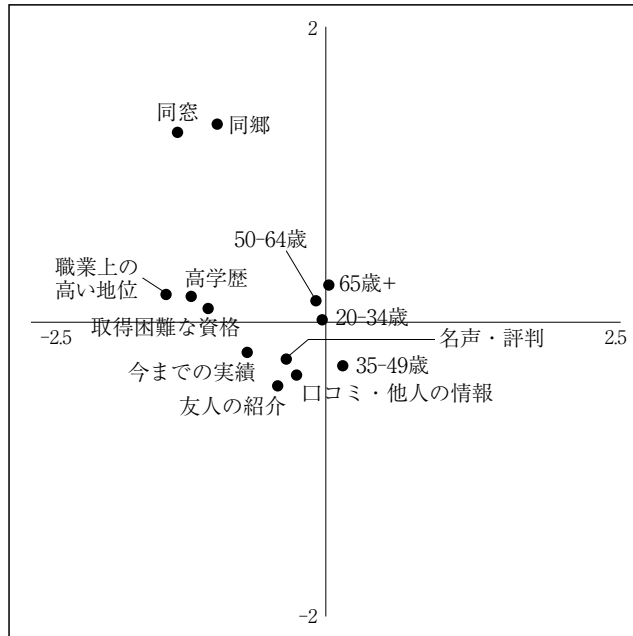
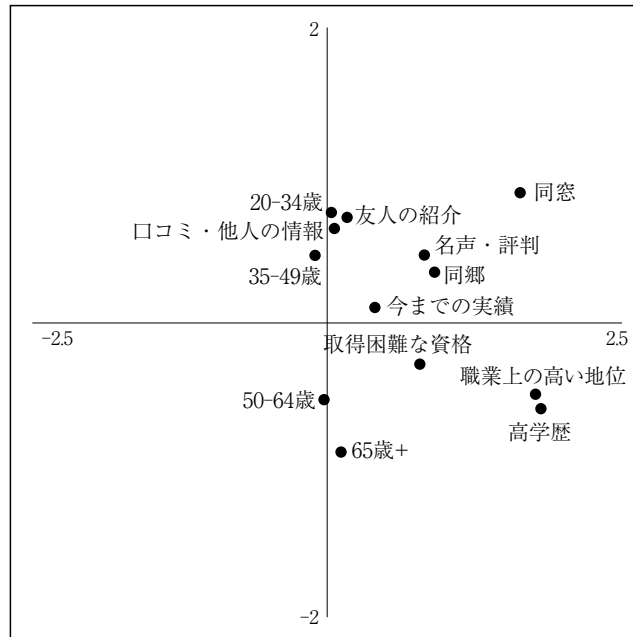


図-25 信頼項目と年齢別の布置図（フィンランド） 1次元=1.854 2次元=1.467



軸ではほぼ順に並んでいる国は、アメリカ、台湾、ドイツ、フィンランドの4カ国である。Aのクリークの「友人の紹介」「名声やよい評判」「口コミや他人からの情報」は、アメリカ、日本、台湾、ドイツ、チェコ、フィンランドにおいて20-49歳に近く布置する。

Bのクリークの「高い社会的または職業上の地位」、「高学歴」、「取得が難しい資格（医者や弁護士など）」は、アメリカ、ドイツ、チェコ、トルコ、フィンランドにおいて、どちらかというとも50歳以上に近く布置する。なお、Cのクリークについては、項目を除外して分析したアメリカとロシアについては、除外せずに再分析した布置図を見ると、日本、台湾、チェコが50歳以上に比較的近く布置している。

8カ国を総合的に見ると、若年齢層（20-49歳）が6カ国において、名声・人的ネットワーク要因を信頼の前提として重視し、高年齢層（50歳以上）が5カ国において高い獲得的地位を、3カ国において「同じ学校や大学の卒業」、「同じ出身地」を信頼の前提として重視するという解釈ができる。

6. ま と め

本研究の目的は、国際比較の視点から1) 信頼の前提となる9項目を設定し、どの項目が対

人関係において相手を信頼する上で重視されているか 2) それぞれの選択項目が互いに関連しあい、組み合わせとなってクリークを形成しているか 3) クリークが形成された場合、各国がどのようにクリークと関連しているか、さらに4) クリークが形成された場合、それらのクリークが属性、特に性別と年齢にどのように関連しているかの4点についての解明を試みた。比較の対象国は、高信頼国のフィンランド、中高信頼国のアメリカ、日本、台湾、ドイツ、中信頼国のチェコ、ロシア、低信頼国のトルコの8カ国であり、我々が2008年から2012年までに実施したこれら8カ国調査のデータについて分析を行った。

その結果、明らかになったことは、1) については、初対面での信頼についての前提として設定した9項目の中でチェコ、ドイツ、フィンランドを除いて「友人の紹介」が5カ国で重要項目として最も高い回答割合を占めている。このことは、シュトンプカ (Sztompka 1999) の述べている“重要な他者”からの情報や友人などの紹介により信頼は伝播しやすいことが、本研究で調査対象となった8カ国中5カ国において、高い割合で支持された。

2)~4) については、コレスポネンス分析を行った。その結果、2) については、信頼の前提となる9項目は8カ国のすべてにおいて、組み合わせとなって3つのクリーク (A, B, C) を形成している。そのうちAのクリークとして、「友人の紹介」「名声やよい評判」「いままでの実績」「口コミや他人からの情報」の組み合わせ、つまり名声と人的ネットワークの要因が抽出された。Bのクリークとして、「高い社会的または職業上の地位」「高学歴」「取得が難しい資格 (医者や弁護士など)」の組み合わせ、つまり高い獲得的地位の要因が抽出された。Cのクリークとして、「同じ出身地」「同じ学校や大学の卒業」の組み合わせの要因が抽出された。その中でも、名声と人的ネットワークの要因が、高い獲得的地位の要因と「同じ学校や大学の卒業」, 「同じ出身地」の要因と比べ、各国とも高い平均回答割合を示していることが明らかとなった。名声は文化的特徴を持つとシュトンプカ (Sztompka 1999) が指摘しているが、人的ネットワークと組み合わせとなって8カ国共通に最も重視される初対面での信頼の前提要因となっている。高い獲得的地位の要因と「同じ学校や大学の卒業」, 「同じ出身地」の要因については、クック、ハーディンとレビー (Cook, Hardin, and Levi 2005) によると、対人関係において相手を信頼できるかどうかについての判断を、人々はステレオタイプに基づいて行う場合があると述べているが、本研究結果から、これらの高い獲得的地位の要因と「同じ学校や大学の卒業」, 「同じ出身地」の要因を肯定的ステレオタイプとして信頼の前提要因として重視していると捉えることができる。また、「同じ学校や大学の卒業」, 「同じ出身地」の要因に関しては、先行研究によると、人々は類似の要因を持つ人を信頼し、持たない人を信頼しない傾向があるが、8カ国調査における項目としての回答割合は、国によってはかなり少ないもののこの傾向が支持されたと言える。これらのことから、それぞれのクリークを形成する項目の組み合わせは国によって若干異なるものの、初対面において信頼するための3つの前提要因は8

カ国に共通して存在していると解釈できる。

3) 各国と形成されたクリークとの関係については、世界価値観調査による国の信頼の低、中、中高に幾分対応していることが明らかとなった。つまり中高信頼国としての、日本、台湾、アメリカ、ドイツ、そして中信頼国のチェコがまとまってAのクリークの近くに布置し、低信頼国のトルコと中信頼国のロシアがBとCのクリークから離れて布置している。なお、高信頼国のフィンランドは中高信頼国のドイツの近くに布置している。このことから欧米、中近東とロシア、アジアがそれぞれのクリークにある程度関連していると解釈することができる。言い換えると、欧米（アメリカ、ドイツ、チェコ）とアジア（日本と台湾）は、中と中高信頼国として共通して高信頼国のフィンランドと共に、名声と人的ネットワークを信頼の前提要因として重視し、中信頼国のロシアは低信頼国のトルコと共に、獲得的地位、「同じ学校や大学の卒業」、「同じ出身地」を信頼の前提要因として重視している。もし、トルコとロシアを伝統的なエリート層が支配する社会で、他の6カ国がより民主的な平等な社会と捉えることができるならば、シュトンプカ (Sztompka 1999) が指摘する「文化によっては、肩書、資格、勲章、他の象徴的しるしなどを信頼の上位に位置付けている。これは、社会的地位または威信の階層が急勾配で伝統的なエリート層の支配する社会において見られる。より民主的で平等な社会では、大衆からの人気の高さやメディアでの露出度などが重視される。」(p. 74) をある程度支持しているといえる。

4) については、性別と信頼の前提要因の関連は弱い。名声と人的ネットワークの要因と高い獲得的地位の要因は、性別との関連で各国にばらつきが見られる。「同じ学校や大学の卒業」、「同じ出身地」の要因については、8カ国中6カ国（トルコとフィンランドを除く）で男性がこの要因を重視している。

年齢と信頼の前提要因との関連は、8カ国中6カ国において若年齢層（20-49歳）が、名声と人的ネットワークの要因を重視し、5カ国において高年齢層（50歳以上）が、高い獲得的地位の要因を重視し、3カ国（日本、台湾、チェコ）において、「同じ学校や大学の卒業」、「同じ出身地」の要因を信頼の前提要因の前提として重視していることがわかる。

謝辞：本章には、統計数理研究所客員教授で中央大学社会科学研究所客員研究員の林文氏から貴重なコメントをいただきました。ここに感謝の意を表します。

注

- 1) シュトンプカ (Sztompka 1999, p. 13) によると、インターネット検索ができるようになったことにより、専門職に携わる一部の人々の履歴、資格などの個人情報が入手できるようになり、信頼できる人かどうかについて比較的容易に調べることができるようになった。
- 2) 調査の詳細については、Masamichi Sasaki and Tadashi Saito. "Measurement of General Trust: A

- Cross-National Analysis.”『中央大学社会科学研究所年報』第19号，2014，pp. 63-64を参照のこと。
- 3) 高い割合を占めているAとBの割合（A/B）は，アメリカが2.9，日本が5.3，台湾が3.5，ドイツが2.7，トルコが1.6，チェコが2.3，フィンランドが2.2，ロシアが1.5となっている。
- 4) 各国の布置図における男女間の距離は，アメリカが0.67，日本が0.31，台湾が0.27，ドイツが0.25，ロシアが0.20トルコが0.63チェコが0.26となっている。

参考文献

- Cook, Karen S., Russell Hardin, and Margaret Levi (eds.). 2005. *Cooperation without Trust?* New York: Russell Sage Foundation.
- Dasgupta, Partha. 1988. "Trust as a Commodity." In Diego Gambetta (ed.). *Trust: Making and Breaking Cooperative Relations*. Oxford: Basil Blackwell, pp. 49-72.
- Delhey, Jan and Kenneth Newton. 2003. "Who Trusts: The Origins of Social Trust in Seven Nations." *European Societies*, vol. 5, pp. 93-137.
- Earle, Timothy and George T. Cvekovich. 1995. *Social Trust: Toward a Cosmopolitan Society*. New York: Praeger.
- Elsbach, Kimberly. 2004. "Managing Images of Trustworthiness in Organization." In Roderick M. Kramer and Karen S. Cook (eds.). *Trust and Distrust in Organizations*. New York: Russell Sage Foundation, pp. 275-292.
- Gillespie, Alex. 2008. "The Intersubjective Dynamics of Trust, Distrust, and Manipulation." In Ivana Markova, and Alex Gillespie (eds.). *Trust and Distrust: Sociocultural Perspectives*. Charlotte, NC: Information Age Publishing, pp. 273-289.
- Hamilton, Gary G. and Kao Cheng-Shu. 1990. "The Institutional Foundations of Chinese Business. The Family Firm in Taiwan." *Comparative Social Research*, vol. 12, pp. 95-112.
- Lorenz, Edward H. 1988. "Neither friends nor strangers: informal networks of subcontracting in French industry." In Diego Gambetta (ed.). *Trust: Making and Breaking Cooperative Relations*. Oxford: Basil Blackwell, pp. 194-210.
- Misztal, Barbara A. 1996. *Trust in Modern Societies*. Cambridge, U.K.: Polity Press.
- Patterson, Orlando. 1999. "Liberty against the Democratic State: on the Historical and Contemporary Sources of American Distrust," In Mark E. Warren (ed.). *Democracy and Trust*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 151-207.
- Simmel, Georg. 1950. "Sociology of the Senses: Visual Interaction." In Robert E. Park and Ernest W. Burgess (eds.). *Introduction to the Science of Sociology* (3rd ed.). Chicago: Chicago University Press, pp. 356-361.
- Sasaki, Masamichi. 2016. "A Comparative Analysis of Trust among Megacities: The Case of Shanghai, Seoul and Tokyo." *Development and Society*. Vol. 45, pp. 503-536.
- Sztompka, Piotr. 1999. *Trust: A Sociological Theory*. Cambridge, U.K.: Cambridge University Press.